

呉美保監督作品 プレミアム上映会

木村直史 三重フェス

2016年12月17日、伊賀市文化会館で「呉美保監督作品 プレミアム上映会」が開催されました。伊賀市出身、気鋭の映画人として大活躍中の呉美保監督を招き、監督作4本を一挙上映、しかも全てに呉監督本人の解説付きという大胆かつ豪華なプログラムでした。

今回は公開順ではない上映スケジュールにも特徴がありました。開場に合わせ、朝の連続テレビ小説の雰囲気でありながら、コミカルに少ししんみりと繰り広げられる母娘を描いた『オカンの嫁入り』。大人と子供、そして社会と家庭を、時に主観的に、かつ客観的に細かく刻んで観せる「きみはい子」。デビュー作でありながら独自の作風が構築され、家族の日常とちよつとした生活のおかしさをロケ地・伊賀市の街並みと合わせてゆつたりと捉えた『酒井家のしあわせ』。そして乾いた空気感の中で、苦しみながらも生きていかねばならない強烈な群像劇『そのみにて光輝く』の構成で、朝9時開場、最終20時30分閉会という、1日がかりの大イ

ベントでしたが、延べ300人の入場者数でした。4本それぞれが持つ独自の生活感、共通する呉美保監督の世界観や社会の捉え方、キャスティングの楽しみ、一気に観ることで言えないような充実感と満足感がありました。

『酒井家のしあわせ』上映後、呉美保監督、タレントであり主演の友近、音楽監督の田中拓人氏、スタイリストの兼子潤子氏の4名による映画トークがありました。『酒井家のしあわせ』から10年、この上野文化会館で当時も試写会が行われ、その振り返りと現在までの思い出話に花が咲きました。印象的だったのは、主演で母親という経験したことのない依頼を受けた友近が、呉監督から「普段通りでいいよ」と言われ、「そんなにウチはオバハンか！」と冗談を交えつつも、役作りが楽しくなっていたというエピソードで、実際に友人同士というおふたりのトークからは、何とも言えないリラックス感というか、呉監督作品に共通する日々の生活の「あたりまえ感」がありました。

そしてロビーには、トークに参加された兼子さんのご厚意で、4作品それぞれに実際に使用された衣装展示が行われま

した。スクリーンで観たばかりの衣装が目の前にズラリ並んでいる光景は、実に圧巻でした。

年末の慌ただしい中でも少し暖かな日でした。丸々呉美保という伊賀市ならではの企画で、これからも伊賀市が生んだ映画人・呉美保を誇りに思いつつ、映画の中に描かれるふるさとを追い続けたいと思います。

